

## 名残りの桜 追想記

西松 布咏

今年ばかりうじて名残りの桜に間に合った。

那須の出稽古を桜どきに合わせたいと日々の予想図に一喜一憂していたが、遂に桜前線と自分のスケジュールが合わず泣く泣く諦め4月7日那須に向かった。那須塩原駅にいつも弟子の高橋美恵子さんが「お帰りなさいませ」と笑顔で迎えに来てくれる。そして思いがけず「桜が先生をお待ちしていますよ」と、いつも心に残っている河川敷の桜並木を車で案内してくれた。

そこはかれこれ5年前加藤さんと満開の桜が風に揺れ、細雪のように華麗に舞う下で共に歓声をあげた大切な思い出の桜並木。

それを覚えていて去年は加藤ご夫妻が車でゆるゆると通って下さった。すでに花は消えていたけれど二人の優しさが心に染みた名残りの桜だった。そして今年。いつも立ち寄る骨董屋の庭の桜が薄墨色の空からはらはらと降ってきて私の心は桜色に染まった。

すっかり諦めていた私を喜ばせようと密かに多貴子さんが神様をお願いをしたのかも。と…今になって思う。興奮冷めやらぬ翌朝起きぬけの目に飛び込んできたのは庭一面の雪景色だった。私は彼女のお陰で一度に名残りの桜と名残りの雪に出逢った  
那須にゆくと独りこもって稽古ばかりしている私を

気にかけて別荘のある山頂から遙々車で食事に誘ってくれたり差し入れを届けてくれたりする多貴子さんが昨年の8月に癌が再発し入院の繰り返しで那須で会うことも出来なくなり、益々寸暇を惜しんで三昧線と取り組んだ。

帰宅が明日という深夜、なぜか眼が冴えてじっとしていられず、目に入る辺りの埃をむきになって拭き掃除。ひとしきり落ちつくと思いついて彼女にメールをした。「便りのないのは無事な証拠と言いますが、あなたのことから…と心にかかっています。明日東京に帰りますが次回の公演のための稽古を沢山しました。去年は間に合わなかったけれど今年は桜に逢えてお二人の優しかったことを懐かしく思い出しましたよ。いつも一緒にの布咏より」



翌12日の夜、会の打ち合わせの帰り道、携帯のベルが鳴り、加藤多貴子の文字。夢中では出ると一人娘の友美さんから。「明け方母が亡くなりました」とつさにバスを待つ道端に泣き崩れた。何を聞いたか覚えていないが、深夜のメールは母の耳元に届きました。それだけが私をどん底の悲しみから救ってくれた。多貴子さんとの思い出はあまりに長く深く何を書いたら良いか・・・

最初の出会いは女子中学校バレーボール部。共にちびだったので後衛でもつばらラインに落ちるボールを大きな声でアウト!と言い合う仲だった。

そしてワンダーフォーゲル部。いつも「美紗の会のついで」のお手伝いをしてくださる高橋利子さん、前多光子さんも一緒にテントを担いであちこちの山歩きをした。

私が1987年に東邦生命ホールで2度目のリサイタル「恋すれば唄」を必死の思いで終えた時、「今度から私が自称マネージャーをしてあげるから心配しないでね」と。この時から今に至るまで滞ることなく私の演奏活動を全身で支えてくれた。

会う人ごとに「この歳まで嫁にも行かず三昧線のちで頑張っていますのでどうか宜しくお願いします」と、いつも母親のように支援してくれ、なぜそこまで?と二人の仲を訝しむ人も出てきた。

かく言う私でさえ「こんな不器量で不器用な私のどこが良くて?」と思いついて来たのだから・・・まさしく二人は全て正反對のポジネガコンビだった。光と陰。太陽と月。白と黒。派手と地味。社交的と非社交的。大胆不敵と臆病小心。樂觀的と悲觀的。まだまだあるがこの辺で・・・

彼女は向日葵で私は月見草。いつも堂々としていた彼女が師匠で私が付き人と間違われたことは今でも私が良く笑い話にする語り草である。最初の海外

公演は1992年マサチューセッツ州のアムハースト大学だった。私のリサイタルにお越し下さったジョンソルト教授が是非学生達に見せたいと「フロムブレポストモダン」と題した舞台に招待して下さいました。舞踊や詩の朗読とともに日本音楽の伝統から未来への展開は好評を博した。終始私は三味線を担いで戦地に赴く兵士のように緊張していたが、彼女は英語も碌に出来ないのに団長よろしくボディランゲイジで学生達をたちまち手懐けて照明の指示や会場の準備を手伝わせる離れ業ぶりだった。

2度目は1993年ニューヨークのジャパソサイアテイでの公演。地唄舞の地方を務める私の着物を着せるために知らぬ間に着付けをマスターしてくれていた。おかげでホテルから劇場への行き帰りは美しい着物が注目された。海外で演奏するきっかけは閑崎ひで女師の舞の会での私の演奏が西松文一師の耳に届き、只一人の弟子としてのお導きがあつたお陰である。6年間差し向かいの身に余る幸せな稽古が続いたが1989年に他界なさった。私が悲嘆に暮れていた時、彼女は私を大阪天王寺に住む地唄界の重鎮であられた菊原初子さんの自宅に私を連れて行つた。誰から聞いたのか虎屋の羊羹が大好き物という初子師にそれを恭しく差し出し「恩師を失った布唄はこれからどのようにして修行を続けたらよいでしょうか？」と伺ったのである。私は不躰とも思えるその問いを俎板の上の鯉よろしく身を固くして聞くだけであつた。初子師はにこやかに笑みを浮かべて、「あれこれ迷わずに布唄さん独自の唄を深めてお行きなさい」とおっしゃった。

その帰り道、彼女は我が意を得たりとばかりに「これから独りで頑張るのよ。私が応援するからね！」と私の背中を叩いてくれた。

彼女の揺るがない覚悟を目の当たりにした遥か昔



写真・前川亮

の鮮明な思い出である。去る5月7日「第65回美紗の会のつどい」は舞台に満面の笑みをたたえた加藤さんの写真を飾り、追悼の会とした。

プロگرامを紐解くと彼女は「第12回美紗の会のつどい」に母の次に「小唄・浮気同志」を唄っている。それから5回続けて何とも愛らしい声で出演してくれたが・・・

稽古が苦手で何かと理由をつけてはさぼり、差し入れのお弁当でごまかしたり。その挙げ句本番は自分で勝手に節付けし私の三味線を止めてしまったことを多めに反省し「次回から私は司会を務めさせていただきます！」とふんわり笑いを誘う名司会を続けることになる。そしてある時「眼が悪くなつて台本が読みにくくなったから」と。以後世話役に徹し骨身を惜しまず現在に至るまで会の発展に力を尽くしてくれた。「今日は加藤さんが舞台にいますので失望させないよう頑張らしましょう」と最初に挨拶をしたが、弟子一同懸命に演奏を披露し毎回お越し下さ

るお客様からも褒められ嬉しく思った。

私も不参加となった草唄さんの代わりに「地唄・芦刈」を演奏した。西行法師の「津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風渡るなり」を彷彿とさせる作詞・作曲共に不詳のこの曲は私の好きな曲の一つである。

「我は恋には狂わねど恋という字に迷うゆえ」私の三味線人生はいつもそうだった。

いつも彼女はそばに寄り添って泣いてくれたが、この日の彼女はそばで微笑んでくれている。

昨年の5月14日の仁和寺金堂での「光と闇のあわい」公演では本堂には入らず、独り間に包まれた厚い扉越しに私の弾き語りを全身耳にして「声が良く響き、とても幸せだった」と言ってくれた。

「心を残す・・・新たな年とは三筋の糸を通して残心の意味を深めてゆきたい」と今年の年賀状に認めたが、日が経つにつれ彼女への想いが名残の桜のように甦ってくる。

これからも迷わず心を残して唄い続けてゆきたいと思う。

## 入門3年目の両国橋

己紗 俊詠

時の経つのは本当に早いもので、美紗の会一門に加えていただいてから16年が過ぎた。自分でもよく続いたものだと思う。

邦楽の世界はいつも新鮮で、新しい曲を師匠から教わる度に、また知らない意識下の何かが目覚めるような気がする。かくも長い期間、お稽古に通うことができたのは、この刺激のせいだったかもしれない。もうひとつ、お稽古はたいいてい詠治さん、高橋





写真・前川 充

君と一緒にただ、ずっと二人で切磋琢磨してきた日々は、本当にかげがえのない時間だった。もし、ひとりだけでお稽古に通っていたら、心の弱い自分は続けていなかったかも、とも思う。高橋君にはその意味で感謝しかない。

ずっと語らずにすませてきた恥ずかしい思い出を書こうと思う。入門して3年目、今から13年前のことだ。

当時勤めていた会社は、夏になると東京湾に屋形船を借りて、しかも全員浴衣姿で宴会を行なうなかなか粋な習慣があった。その年も、7月初めの週末の夕方、花火大会でもないのに晴海に50人もの浴衣姿の男女が集まった。全員が団扇を片手に屋形船に乗船する。僕はひとり三味線を抱えて乗りこんだ。

「福岡さん、三味線やってるんだって?」「ええ、まあ」

屋形船宴会の3日前のことだ。宴会の幹事の女性から呼び止められた。世話好きで、社内の誰からも愛されている、そんな女性だ。

「屋形船で三味線弾いてくれないかしら」「え……」

引き受けてしまった。自身の実力も顧みず。断われない相手だったこともある。が、みんなが知らない世界のものである邦楽をやっていること、そのことを得意げにどこかでしゃべっていたのだろう。そして、ドヤ顔で披露したかったのだろう。今思い出しても大嫌いな自分がそこにいた。

その日の東京は猛暑日、夕方になっても気温はさほど下がらず、海の上は涼風どころか、湿気を猛烈に含んだねっとりした不快な空気で満たされていた。宴会は空のビール瓶が増えることに盛り上がり、座興の時間となった。さあ、自分の番、ちよつとした晴れ舞台だ。糸の調子を合わせ、三味線を構える。屋形船で演るにはこれ以上はない曲「縁かいな」。撥を下ろす。テチンテン、ドーン。あれ? 音出てる?

一の糸がまったく響かない。本来ならドーンという音が、かすったような「ド」にしか聞こえない。撥を強くあててもあてても、三味線らしい音は鳴ってくれない。湿度で糸が伸びきっていた。二の糸も半音ばかり音が下がっている。頭の中が真っ白になった。

そのあとのことはあまり覚えていない。最初はこちらを注目してくれていた人たちは、パニックになっている自分から視線を避けるようにいつの間にか宴会に戻っていた。演奏が終わったことにも一瞬気づいてもらえず、一礼をしてようやくぱらぱらと拍手が起こった。穴があいたら入りたかったが、海の上ではどうにもならなかった。たっぷりかいたイヤな汗を乾かそうと甲板に出ると、屋形船はちょうど隅田川を上り、両国橋の下をくぐるところだった。

・ 出船 入船 屋形船 上がる流星 星下り。

星とともに下ってしまったかった。下手でもいいや。ただ悔いのないよう一生懸命に歌って、必死になって弾こう。そう誓った。

この度、美紗の会の会長を、詠治さんと一緒に引き受けすることになりました。13年前の恥ずかしさから学んだのは「謙虚である」とはどういうことか、でした。唄も糸も、これまでの会長を務められてきたお歴々からすると見劣りしますが、謙虚であることだけを自身の徳として、これからも皆様とともに精進していきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひ致します。

冗談のような軽い気持ちから、  
いつの間にやら「十六年」己紗 詠治

思い返せば西松布詠師匠と初めて出会ったのは二〇〇七年だっただろうか(もはや記憶が定かではない、笑)。松岡正剛さんが主宰する「連塾」終了後の懇親会であった。当時福岡さん(俊詠さん)も私もアスキーという会社に勤務しており、「三味線でも習

いたいね」などと冗談のように言っていた頃で、松岡さんに「いい師匠はいませんか」とやはり冗談のように聞いた際、偶然近くにおられた師匠を紹介していただいたのだった。

それから稽古を見学させていただき、入門を許され、稽古が日常になり、二〇一五年には名取として名前もいただき、あれよあれよという間に丸々「十六年」が経過した。その間、入門時におられた先輩たちが鬼籍に入られたり、健康上の理由、もしくは仕事上の都合で会を離れられたり寂しいこともあった。一方で、新しい方たちが次々と入門し、めきめき腕を上げる様子に呑気に感心していたら、いつまでも若手だと思っていた自分が結構な古株になっていったというわけである。

自分自身も二〇〇八年には会社をやめ、個人事務所を設立してフリーランスとなり、二〇一九年からは新設の大学に招聘されて教員となったり、人生の紆余曲折というか、目まぐるしくも慌ただしい変化を経験した。こうして冷静に考えれば「そりゃ、大層な年月が経っているだろうよ」ということなのだが、「十六年」という数字にはまるで実感が湧かず、まるつきりピンとこないのである。

そこへ、前会長の佳咏さんがやむ得ぬ事情で辞められるということで、師匠から「俊咏さんと一緒に会を引っ張ってほしい」と言われたときは、「そうか、もう、自分は若手どころが中堅でもないのだな」と、改めて思い知らされた気がした。繰り返しになるが、入門した時は三十八歳だった自分がいまや五十四歳なのだから、師匠からの依頼も決しておかしい話ではないのだ。そういえば、稽古した曲の譜の数もいつの間にか信じられないくらいの量になっているし……。

正直、「いやあ、まいったな」と思った。それはひ

とえに、無駄にキャリアだけ積んだもののそれに見合う技量が身に付いているかどうかに対する疑問と不安である。そうした責務を負う以上、年二回のお遊び会のときには当然のことながらトリをつとめるわけだから、「なかなか上手くなったじゃないか」くらいのレベルで許されるはずもなく、しっかりと



写真・前川充

締めにふさわしい唄なり三味線を披露しなければならぬ。大任である。重責である。光栄であるという晴れがましい気持ちもないではないが、圧倒的に憂鬱である。まことに陰々滅々たる思いというほかない。

しかし、そんなことも言っていられないのも事実で、なにせ「十六年」もやってきたわけだから、いつまでもペええ気分では師匠に申し訳がないし、お遊び会を見に来ていただくお客様にも失礼だし、もはや言い訳もきかないし、逃げも隠れもできないだろう。ここはひとつ、覚悟を決めてからなければならぬ……と、五月七日の美紗の会のあと、あらためて痛感した次第である。どこまで貢献できるかわかりませんが、皆さま、今後ともご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 閑崎扇ひでりサイタル「扇の会」 に「ゆき」を想う 己紗 秋咏

地唄「ゆき」……多くの人に愛され歌舞伎や落語などにも登場する名曲中の名曲。

邦楽ファンの私の中でも「ゆき」は特別の位置にある。

十五年前、三味線の師匠を探していたとき布咏先生のCD「SEK SOUL」に出会った。一曲目に収められていたのが「ゆき」。初めて聴く布咏先生の声……入門したい旨のメールを送ったのはそれからまもなくのこと。

そして昨年、京都仁和寺で「ゆき」を聴いた。あのときの心の有り様を何と表現したらいいのだろう。思い出そうとすると、いまも、現では無いような不思議な感覚に囚われる。蠟燭のゆらめく灯りの中、



静かに響く声と三絃の音。唄が進むにつれ、その響きが身体の中に入ってきて、あちこちに潜む、或いは心の奥底に沈殿している感情が引つ張り出され、溢れ、激しく揺さぶられるのが自分でも分かった。演奏が終わっても、堰を切ったように流れ続ける涙は止めることができなかった。

三月十九日、紀尾井小ホール、第三回リサイタル「扇の会」で、閑崎扇ひでさんが「ゆき」を舞った。その日は奇しくも閑崎流創設者、閑崎ひで女師の命日。布咏先生とも深い縁で結ばれていたひで女師は「ゆき」を最も愛していたという。

冬の夜、恋に破れ浮世を捨てて尼となった芸妓が、断ち切れぬ恋の思い出に引き込まれ、現れぬ恋人への思いに涙する。

ひで女師が用いたものと同じだという、黒地に雪の舞う衣装に身を包んだ扇ひでさんは浮世絵とも見紛う美しさだった。透ける傘越しに見える横顔は愁いを秘め、隅々にまで神経の行き届いた流れるような動きの中、寂しさ、哀しさ、切なさがしみじみと伝わってきた。「心も遠き夜半の鐘」に続く合の手では、傘を置き、身ひとつで哀しみを表現していた。間遠に響く三絃の音に合わせ、鐘の音を指折り数える白い手が眼裏に残っている。

お祖母様でもある、ひさ女師が「まだまだ未熟ではあるけれど、今の若い貴女にしかできない『ゆき』を舞いなさい」と仰ったとのこと。今回の舞台を見て得心した。板東玉三郎の「ゆき」は、過ぎ去ってしまえば残るのは我が身ひとつ、との諦念が全体を覆っていた。それとはまた違う若い扇ひでさんだからこそ「ゆき」。どれほどの重圧があったか・・・幕が下りた後の会場いっぱい拍手。舞いきった扇ひでさんに、今一度、心からの拍手を送りたい。扇ひでさんの演目は他に二曲。「水鏡」では叶わぬ



恋に落ちてしまった(今風に言えば、沼ってしまった)遊女の女心を、琵琶湖と近江八景の美しさに託してしつとり描き出していた。もう一曲は趣の全く違う「三国一」。お大尽になったり美しい白拍子になったり、捨てられた不器量な本妻になるときはお多福の面をつけ、持ち前の伸びやかな肢体を存分に使って表情豊かに生き生きと舞い演じていた。

会では特別出演として、ひさ女師が「忘れ唱歌」を軽妙洒脱に舞い上げてくれた。御年九十歳とは思えぬ軽やかさで、会に厚みと温もりを加えてくれた。

例年より暖かい日が続く、迎えたその日も空は晴れ渡り、道路脇の桜も会の成功を言祝ぐように花を開かせていた。

思えば、前回、第二回リサイタルはコロナ禍のまっただ中、開演前のホールは異様な静けさと緊張感に包まれていた。感染が落ちてきた今、穏やかに心ゆくまで文化・芸術を享受できる幸せを思う。

## 築地明石町への想い

前川真紀子(紫咏)

昨年の五月、布咏師匠から、はじめて築地明石町の唄をお教えたいただいた時、鍋木清方さんの絵が、すうつと目の前に思い浮かんだ。唄の歌詞も糸の調べも、あの絵を題材にしていることは疑いようもなく、透明感のあるあの麗しい人の佇まいと遠景の空気を唄と糸で表現するのには、どうしたら良いのか？ずっと悩みつづ、師匠にお稽古をつけて頂く時間がいつにも増して待ち遠しく、愛おしく感じた。

清方さんの絵との初めての出会いには、まだ学生時代の頃。その時分に最も魅かれた絵は、清方さんのお嬢さんをモデルにしたという、おさげ髪の瑞々しくも凛とした佇まいの少女の絵だった。あとで知ったことだが、築地明石町の絵は、長らく所在不明となっていたそうで、2019年に竹橋の国立近代美術館で公開されるまでは、この絵にリアルに出会う機会はなかった。2019年の公開の際にも、初めて出会ったこの築地明石町の絵からなかなか立ち去るこ

とができなかったが、昨年の没後50年の回顧展では、殊更に、行きつ戻りつ、どうしても出口方向へ向かえない。夜会巻きの結い上げ髪、浅葱色の単衣の小紋と東下駄に素足の女性が、物思う表情で振り返り、盛りを過ぎた名残の朝顔の前に佇み、初秋の朝の冷たい風に黒の羽織の袖を掻き合せている。麗しい人だが、目元には、一筋のやつれも見受けられる。春夏秋冬で例えるとしたら、あのおさげ髪の少女が春なら、築地明石町の麗人は秋のひとつ、だろうか。その憂いを帯びた表情と遠景にうつすらと浮かび上がる帆前船を見送る情景。かつての思ひ人を密かに見送りに来たのだろうか。傍らの夏の名残の朝顔と、一人残されたわびしさが、彼女の口元の薄い紅の色と重なり合うかのように心に染み入る。この感覚は、2019年の初回の出会いには感じられなかったものだ。それからほどなくして、布咏師匠のお導きで、築地明石町の唄とこうして繋がることになった。

築地明石町の唄も絵も、今や私にとって特別な存在(宝物)。清方さんの思い出の中にある明治30年頃の古き良き時代の明石町を描いたというこの絵と、「行くうー水うーやーあー」で始まるこの唄と1年かけてじっくりと向き合うことができたのは、布咏師匠のおかげで得られた望外の幸せ。幸せではあるが、一方で、1年かけて「どう表現したらよいのか?」悩み続けてきた。昨年再会した回顧展では、離れがたい麗人の絵を、藤色の地紋様の着物に塩瀬の花文様の帯をあわせた自分が、時を忘れてじっと見つめ続けていた。それから、ずうっとずっと、この唄を弾き語るたびに、あの絵の情景がくつきりと浮かび上がってくるのだ。すると、自分の唄も糸も到底、あの清方さんの絵の透明感を表現することができないという想いに行きつき、迷い、師匠に繰り

返し教えを乞うた。布咏師匠は、いつもお稽古場で、たいそう丁寧なお稽古をつけてくださる。表現のテクニク的なことにとどまらず、唄の心を理解することから始まり、それを唄と糸にどう乗せていったらよいのかを、私と共に、一緒に考えてくださる。師匠のお導きで、表現と一緒に紡ぎだしてゆく過程が、なんと貴重なひと時であることか。私は、おさらい会(美紗の会のつどい)が終わった後でも、その時の唄を生涯大事にしていきたいいつも思ってきた。同じ絵でも時をおいてからもう一度再会すると、以前と感じが異なることに気づく。唄も同じように、同じ唄でもその時々によって表現したいこ



写真・前川 充

と、以前と感じが異なることに気づく。唄も同じように、同じ唄でもその時々によって表現したいことが変わってくる。以前には気づかなかった唄の奥底に眠っていた想いに出会えることもあるから、一度唄ったらおしまい、なんてもつたいたいことはない。そういう考えに行きつくようになったのも、布咏師匠とお稽古だからこそ。師匠が、「一緒に良い唄に仕上げていきましょね」とおっしゃる言葉に、私はいつも支えられており、深く感謝している。今、私の目の前に、清方さんの回顧展のチケットがあり、築地明石町の絵に「なんでもない一瞬が、なによりも美しい。」という言葉が寄せられている。私にとって、布咏師匠との出会い、美紗の会との出会いのおかげで、日常の中のなんでもない一瞬にはっとさせられたり、それが唄の表現へと繋がっていったりという、なんとも贅沢な時間を日々、頂いている。このすばらしき縁に改めて感謝し、これからも末永く精進を続けて行きたいと心より思う。

布咏師匠、皆様、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

### 「今を生きていくこと」—— 第六回美紗の会を聞いて「ヤリタミサ」

昨年四月二十九日の美紗の会も雨でした。伝統ある木造建築のお座敷とそこに漂う情感には、陰りが似合うと思います。コロナ禍の三年間を経てようやくマスク自由となったこの春、色々な変化も現われてきています。佳咏さんが卒業され、美紗の会を支えていた布咏さんのご友人が急逝され、昨日まで続いていた日常は今後も当たり前前に続くわけではない、という現実を直視せざるをえません。人も命も無限



ではないから、今、ここでの一期一会が大切なのです。舞台では、雨のため湿度が高くて糸のチューニングが難しく、皆様ご苦労されていました。特に二人で弾く糸は、いつも以上にたいへんだったと思います。短い時間でも音程が動くようで、普段どおりの実力を発揮できない悪コンディションでした。それにも関わらず、会の皆様全員が演奏を積極的に楽しむ姿勢を強く感じました。いつも以上に、この舞台に熱意を持って臨んでいるのがわかります。一人一人の演奏は、互いに意識し合うことでプラスアルファの力が湧いてきます。そして美紗の会という場の力がアップするのだと思います。

皆さんの熱演の中で印象に残ったところは多々あります。「香水」の秋詠さんの艶のある声や、「茶のとが」の川崎さんの言葉の末尾が細く長く伸びて余韻を残す唄は、先人のスタイルの上に自分独自の工夫が重ねられているようです。「我がもの」は男心の唄で詠治さんに向いている作品ですが、どこか遠慮がちに聞えたのもう少し自分らしさを主張してもよいと思います。「やらずの雨」では、高橋(祥)さんの品のある声が粋な世界を作り上げていました。詠治さんと俊詠さんの二人の糸の呼吸もぴったりで、安心して聞けました。秋詠さんの「松魚勇商人」というイキオイのある唄は、威勢良く切れ味よく、小さなお芝居のように楽しめました。「西行」の詠扇さんはしっかりと糸と唄が合っていて、自分自身の身体を通して唄を理解し表現していることがわかります。「傘の内」の典詠さんはよく響く声で、セリフがぴしっと決まっています。「雨の宿」の俊詠さんはもう少し高音が欲しいところですが、全体としては渋めの世界でよくまとまっていたと思います。「卯の花」の悠詠さんはベテランの存在感で、芸者のセリフ部分もきっぱりと、唄を巧く語っています。地声とファ

ルセットの連結部であるミックスボイスの使い方が上手だと思います。「菊の露」の鶴詠さんは、地唄特有のゆっくりとしたテンポで、唄だけでも地唄舞の濃密な踊りが見えるような演奏でした。最後の扇ひでさんと布詠さんの「六歌仙」は、雨の景色をぱっと消し去ってくれるような踊りでした。茶摘みでは青空が見え、扇子のアクションではリズムカルで楽しい人物像が描かれます。

今回は、後半に一人で唄と糸を演奏された皆様全員、非常に充実した演奏だと感じました。糸に気を取られると唄が少しおろそかになったり、その逆だったり、今まではそういった点も散見されました。が今回は唄の心が伝わってくるのと同時に、糸の表情もよく表現されていて、描かれた世界をゆるやかに楽しむことができました。技術力のうえに、表現力が確実に積み重なった結果だと思われます。布詠師匠のご指導があるとはいえ、唄の世界を一人で作り上げて聞き手に届けるためには、自分に向き合う濃密な時間が必要です。おそらくコロナ禍の状況下、孤独な作業を進めることによって進境著しく歩まれてきたのでしょうか。その見えない時間は水面下で表現を支えているのだと思います。

西洋のオペラは開いていく方向だが、それに対して東洋の表現は内へ内へ向かう方向だ、とある俳優さんが語っていました。練習の時間も失敗の経験も喪失の哀しみも自分の内部へ蓄積し、どこかで別な地下水脈に結びつき、何年か経た段階で新たな湧水となります。だから、今、悲しいことは悲しみ、楽しいことは楽しみ、その場の自分を生きることが明日の自分につながるのでしょうか。また、今回の皆様の熱演を楽しみにしております。



第65回美紗の会のつどい

●今後の予定

6月24日(土) 12時・16時開演

「藤十郎の恋」

人形町 よし梅 芳町亭

黒髪

舞踊 篠井英介

唄と三絃 西松布咏

藤十郎の恋 菊池寛

朗読 篠井英介

演奏 西松布咏

9月23日(土) 16時30分～18時30分

第10回 薊の会「初秋の集いⅡ」

ホテルエピナール那須 宴会場

美紗の会の仲間によるコンサート

12月4日(月) 18時30分～20時30分

両国 シアターX

闇に灯る聲——鏡花の世界——

唄と三味線 西松布咏

朗読 山根基世

尺八 善養寺恵介

仕舞 清水寛二

舞踊 服部真湖

■たより第98号

発行者 美紗の会

編集責任者 己紗俊咏

デザイン 近藤幹則

■美紗の会

主宰 西松布咏

稽古場 港区白金台三・二・二

白金台プレイス三階

電話 (五四四七)二四二二

E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: <http://www.misanokai.com/>